

平成18年度 校内共同研究計画

I 研究主題

確かな学力を身につけさせるための指導法の改善 —— 算数少人数指導・習熟度別指導，教科担任制を通して ——

II 主題設定の理由

1 今日的な教育課題から

変化の激しい社会の中で，児童が将来にわたり主体的創造的に生きていくために，今教育界では「確かな学力」「豊かな人間性」「健康や体力」で構成される『生きる力』をはぐくむことが強く求められている。とりわけ、『生きる力』の知的側面である「確かな学力」を確実に身につけさせることが大きな課題となっている。

こうした「確かな学力」を身につけさせるには，学習指導要領に示されている基礎的・基本的な内容の確実な習得・定着のために，「個に応じた指導」の一層の充実を図らなければならない。また，学びの特質に応じた「分かる授業」を行うことにより，児童の意欲を高め自発的な学習を促すことが重要である。

2 本校の教育目標から

本校では「創造的な知性，豊かな情操，健康な体を養い，生きる力を備えた児童を育成する」ことを目標に「進んで学ぶ子ども」「互いを思いやる子ども」「健康でたくましい子ども」をめざす児童像として設定している。これらの目標を具現化するために，本校では特に確かな学力を身につけさせる『学力保証』及び集団生活を通して人間形成を図る『成長保証』を掲げて教育活動に取り組んできた。

分かる授業を通して学力を保証し確かな学力を身につけさせることにより，児童は達成感・成就感を感じ，自己の能力に自信をもって学習に取り組むであろう。また，教師が児童のよさに着目し，引き出す指導を行うならば，児童が互いの長所を認め合い切磋琢磨するであろう。学力を保証することは，このように児童の成長・発達を促す成長保証に通じると考える。

3 これまでの取り組みから

(1) 平成13年度

- ・3学年以上の算数科において，児童の学びの特質に応じた学習形態・指導方法を追求するためにグループ別指導を行った。

(2) 平成14年度

- ・3学年以上の算数科において習熟度別指導を実施した。

(3) 平成15年度

- ・3学年以上の習熟度別指導に加え，1・2学年の少人数指導及び6学年の教科担任制を導入し，全校指導体制のシステム開発による児童の基礎学力の向上に取り組んだ。

(4) 平成16・17年度

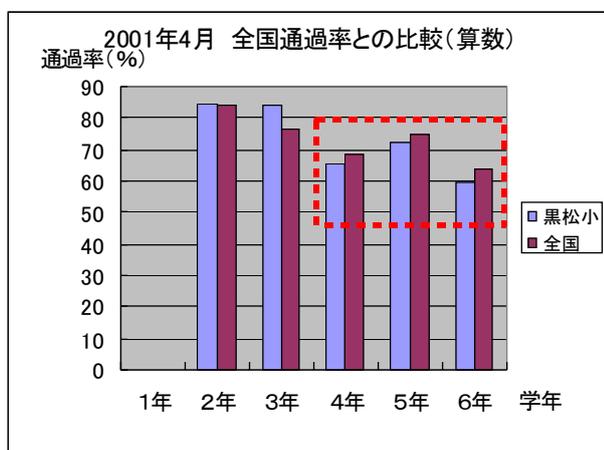
- ・仙台市教育委員会より自主公開校の認定を受けた。少人数指導・習熟度別指導，教科担任制というシステムを生かした授業づくりに焦点を当て，個々の授業の質的な向上を図るための指導法の改善に研究の重点を置いた。具体的には，児童の学びの特質に応じたきめ細かな指導をすること

により、一人一人の力を伸ばす授業をつくること、興味や関心を喚起し学習意欲を持続させるための魅力ある授業を作ること、教師の指導技術を向上させ得意分野を生かした授業をつくることなどに取り組んだ。

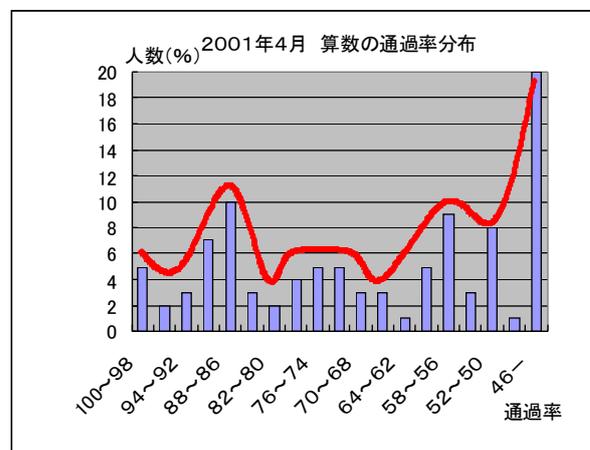
4 児童の実態から

平成13年(2001年)4月に実施した算数の標準学力検査(Criterion Referenced Test～CRT)では、総合通過率が、2・3学年までは全国平均を上回るものの4学年から6学年の上学年においては全国平均を下回っていた。(図①) また、上学年ほど通過率60%未満の児童が多く見られるという結果になった。(図②) しかし、平成14年度から習熟度別指導を取り入れ全校指導体制を整えてからは、通過率60%未満の児童が減少し、中・高得点層の児童が増加した。どの学年においてもほぼ全国平均を上回る結果を得るなど、全体としての底上げが図られた。また、児童に対する学習意欲に関する調査でも全般に意欲面の向上が見られた。

これらのことから、これまでの本校の取り組みやシステムは、算数科の学力向上に有効な手だてであったと考えられる。



【図① 全国通過率との比較】



【図② 抽出学年の通過率】

全体としての底上げがなされている一方で、少人数で時間をかけ手厚い指導が必要な児童や、理解はできているもののなかなか定着が図られない児童がいる。また、高得点層の中にも既習事項を使いこなす力が不十分で、考えた事柄を自分なりにまとめたり発表したりすることが苦手だという児童が少なくない。このようにそれぞれの児童が抱えている様々な課題に対して、少人数指導や習熟度別指導を生かしながら、個に応じた指導を一層進めていくことが必要だと考えている。

また、社会全体の価値観の多様化に伴い、児童の興味・関心の対象も広がりを見せるようになってきた。物事を論理的に考えたり関連的に思考したりする力が著しく成長する高学年の時期に、教師の得意分野を生かし質の高い授業を展開できる教科担任制を導入することによって、児童の多様な興味や関心を引き出し「もっと知りたい、できるようになりたい」という意欲を高め、主体的な学びを創り出したいと考えた。

以上の理由により、少人数指導・習熟度別指導、教科担任制を通して、「確かな学力」を身につけさせるために指導法を改善していきたいと考え、本主題を設定した。

Ⅲ 研究主題と副主題について

1 「確かな学力」について

本校でとらえる「確かな学力」とは、平成8年の中央教育審議会答申以来一貫して示されている「生

きる力」の知的側面を指しており、「知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等まで含めたもの」（文部科学省ホームページより）である。

こうした「確かな学力」は、学習指導要領に示された基礎的基本的な内容の確実な習得・定着により身につけさせることができると考える。

2 「指導法の改善」について

指導法の改善の第1の側面は、学校全体で指導体制をシステム化することによる改善である。

算数科において1・2学年では少人数指導、3～6学年では習熟度別指導を行っている。1・2学年では学級担任に1名の加配教員加え、学級を二分した少人数グループで指導している。3～6学年では各学年2名の加配教員を加えた（学級数+2）グループによる習熟度別指導を行っている。さらに6学年においては、教科担任制を導入している。

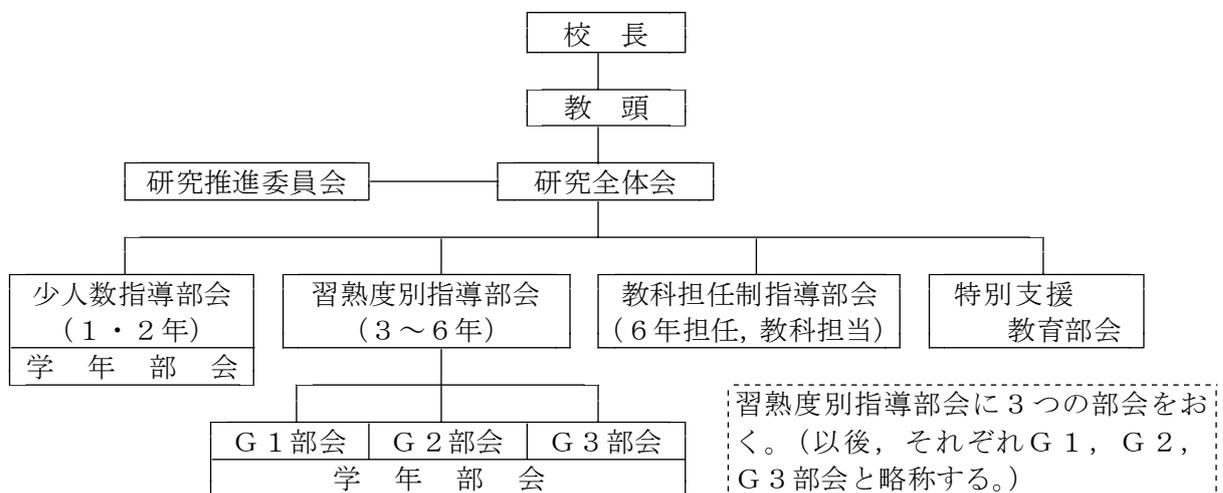
第2の側面は、個々の授業の改善である。

少人数指導や習熟度別指導では、児童の学びの特質に応じた指導を実現するために量的にも質的にもきめ細かな指導を追求している。一方、教科担任制による指導では、授業の質的な改善によって児童の興味・関心を持続させ「分かる授業」を目指している。

IV 研究目標

確かな学力を身につけさせるために、算数科における少人数指導や習熟度別指導、及び6学年の教科担任制を通して指導法の改善を図る。

V 研究組織



- ・グループ3 (G3)・・・「既習事項を振り返りながら、基礎・基本の習得に重点をおくグループ」
- ・グループ2 (G2)・・・「自力解決の力を高めながら、基礎・基本の確実な定着に重点をおくグループ」
- ・グループ1 (G1)・・・「基礎・基本の確実な定着と応用・発展学習に重点をおくグループ」

【研究の進め方】

学年部会、教科担任制指導部会、特別支援教育部会を研究推進の母体とする。

※少人数指導部会、G1, G2, G3部会は必要に応じて部会を設定する。

VI 各部会の主題

- 少人数指導部会
「低学年における基礎・基本の習得と確実な定着を図るための指導法の改善」
- 習熟度別指導部会
 - G 3部会「基礎・基本の習得を図るための指導法の改善」
 - G 2部会「基礎・基本の確実な定着を図るための指導法の改善」
 - G 1部会「基礎・基本の確実な定着と応用・発展学習を進めるための指導法の改善」
- 教科担任制指導部会
「児童のよさを認め、学習意欲を喚起するための指導法の改善」
～6学年における教科担任制を通して～
- 特別支援教育部会
「軽度発達障害等を含めた障害をもつ子供の理解と支援について」
～校内支援委員会を中心とした理解啓発活動をとおして～

※基礎・基本について

算数科における「基礎・基本」とは、「児童の生活や学習での様々な活動の基になるものである。例えば、『日常生活での活動の基になるもの』、『学校でのいろいろな学習の基になるもの』、『算数を続けていく基になるもの』、『将来の社会生活や生涯にわたっての活動の基になるもの』などが挙げられる。」（「小学校学習指導要領解説 算数編」より）

本研究では、学習指導要領に示された各学年の目標及び内容を「基礎・基本」ととらえ、基礎・基本の「習得」、「定着」及び「応用・発展学習」については、以下のように考えている。

- 「習得」・・・学習した内容を理解し、自分の力で使いこなせる状態。
- 「定着」・・・学習した内容を長期に渡って理解しており、いつでも既習事項として自由自在に使いこなせる状態。
- 「応用、発展学習」・・・学習内容の理解を深めたり、広げたりする学習。
こうした学習を行うことにより基礎・基本をより確実にすることができ、興味や関心、数学的な考え方を高めることができるものを指す。

VII 研究の視点

1 指導計画の工夫

- 少人数指導用年間指導計画（1・2学年）の工夫・改善
- 習熟度別指導用年間指導計画（3～6学年）の工夫・改善
- 選択学習（3～6学年）の実施・拡充

2 指導方法及び指導過程の工夫

- 課題提示の工夫
- 自力解決に導くための工夫
- 児童の考えを生かした学び合いの工夫
- ノート指導の工夫

3 評価の工夫

- 学習状況を的確に把握するための各種調査の実施
- 指導計画における評価規準と判断基準の明確化

- 指導と評価の一体化を図るための工夫
- 学習チェックカードの活用
- 「基礎・基本の手引き」の活用

4 教科担任制による指導の工夫

- 教科担任制のシステムの開発
- 教科担任制の具体的な取り組み（実践）
- 教科担任制による指導効果，学力向上の検証

Ⅷ 18年度 研究の方向性

1 一人一人の授業力の向上

- 児童の学習意欲を喚起し持続させる授業作り
- 基礎・基本の習得と定着を図る授業作り
- 学び合いによる児童相互の学習の深化を図る授業作り
 - ※ 指導法に関する研修会の設定（現職教育）
 - ※ 授業評価に関する研修会の設定（授業リフレクション等）
 - ※ 年間一人一研究授業による授業力の向上

2 システムの工夫改善

- 少人数指導システムの工夫改善
- 習熟度別指導の工夫改善
- 教科担任制による指導の工夫改善
 - ※ 上記指導システムを授業実践を通して，工夫改善する。

3 次年度の研究の方向性を探る

- 本校の教育目標，目指す児童像に向けて
- 本校の児童に身につけさせたい力
- 学校教育に求められているもの（今日的な教育課題）

Ⅸ 研究全体構想図



平成18年度 校内共同研究 年間計画

月	内 容	研 究 授 業	システムの試行	学校行事等
4 月	研究計画立案 ・研究推進委員会（研究の方向性） ・研究全体会（校内共同研究計画について共通理解） 授業実践			始業式・入学式 授業参観
5 月	各学年の研究計画立案 ・研究推進委員会（各学年の研究計画報告）			春の遠足
6 月	・研究推進委員会 ・救命救急講習会（現職教育） ・30日 研修会（算数の授業作りの講話） ：菅原敏彦先生	・3年大山（G2） ・3年泉（G1） ・すみれ（菅原） ・なのはな（植西） ・ことば1（金子） ・ことば2（鈴木）	・2年 「ひき算のひっ算」	修学旅行
7 月	・研究推進委員会	・4年鳥居（G1） ・6年本木（音楽）	・6年 「単位量あたりの 大きさ」	まつのみ祭り 個人面談
8 月	・音楽実技研修会（現職教育） ・パソコン実技研修会（現職教育）			学校評議委員会
9 月	・5日 研修会（授業力向上に関する講話） ：相澤秀夫先生 ・研究推進委員会（システムについての協議） ・第1回全校授業研究（5年：菅原）	・5年神田（G2） ・5年木越（G3） ・5年種田（G1） ・5年菅原崇（G2） ・4年太田（G2）	・3年 「長いものの長さの はかり方」 ・5年 「小数のかけ算」	学区民運動会 陸上記録会 授業参観

	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育研修会（現職教育） 			
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究推進委員会（次年度のシステムについて） ・第2回全校授業研究（1年：小林） 	<ul style="list-style-type: none"> ・4年今藤（G1） ・4年日野（G3） ・4年星（G2） ・1年全クラス 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年「たし算」 	野外活動 学習状況調査
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究推進委員会 	<ul style="list-style-type: none"> ・2年全クラス ・6年木村（体育） ・6年阿部（社会） ・5年氏家（G3） ・6年今野（国語） 		就学時健康診断 総合防災訓練 まつのみ音楽会
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究推進委員会（次年度の研究の方向性） ・第3回全校授業研究（6年：五十嵐） ・図工科研修会（現職教育） ・書きぞめ研修会（現職教育） 	<ul style="list-style-type: none"> ・3年村山（G2） ・3年佐藤（G1） ・6年五十嵐（G1） 		個人面談 （紅白歌合戦）
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究推進委員会（次年度の研究の原案作成） 			
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究推進委員会 ・研究全体会（研究のまとめ・次年度の研究の決定） ・学習意欲に関する実態調査 			入学説明会 授業参観
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究推進委員会 			卒業式 修了式